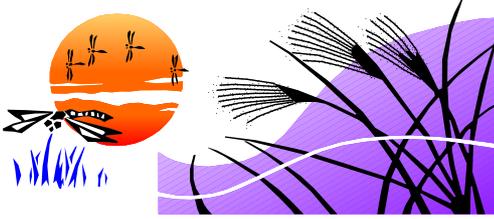


2002.10.1

循環器・呼吸器病センター

だより
第17号



病院長
堀江
俊伸

紅葉の候、先生におかれましては益々御清勝のこととお喜び申し上げます。とま
 さい、当センターは、来年度、オーブンターは、え
 の間、循環器、呼吸器における専門病院として、ま
 した。実績を積み上げて参りました。朝日のおほいさな
 ン朝日のおほいさな、心臓病手術件数は、9位に
 肺がん手術件数は、6位に、ま
 が薦め、週単位では、6名に
 に行かれました。4冠動脈形成術
 の件数も、この4月に、心臓
 の感謝状をいただきました。ま
 臓力増進、心臓病の予防、心
 の増加、心臓病の予防、心
 テーテル室を一つ増やして、三
 室で対応することとして、お
 ります。この他、脳神経外科では、
 5名の専門医が交代して、十
 四時間常駐し、対応してお
 ります。今後とも医師会の先生方
 との連携を図り、埼玉県の方
 高・連携を専門医を担って
 高度・専門医を担って、御理
 解・御協力を賜りますよう
 よろしくお願致します。

心疾患診断におけるCT, MRIの役割

放射線科副部長 星 俊子

循環器疾患のうち、大動脈疾患においてはCT, MRIが重要な役割を担っている事は言うまでもありません。しかし、心疾患についてはこれまでは画像診断といえば、心臓カテーテル検査、超音波検査、核医学検査が主流でした。この2, 3年、心疾患に対してもCT, MRIが研究目的ではなく、実際に臨床に役立てるために行われるようになってきました。従来の装置は、心拍動を制御する能力がなかったのですが、最新の機器ではそれが可能になりました。時間分解能の向上と心臓を明瞭に描出する撮影方法、画像再構成の方法の開発が各社で競って行われた結果、以前とは比べものにならない明瞭な心臓の画像が得られるようになりました。現在のところは、日本国内ではCT, MRIに力をいれている循環器専門の数施設で症例の蓄積がされて報告されている段階ですが、臨床上の有用性は疑うべくもなく、これらの検査が普及するのも時間の問題でしょう。

侵襲の少ない検査で冠動脈の狭窄、壁運動、心筋虚血、バイアビリテイ、心機能のすべてを検査できるとしたら、これを利用していかない手はありません。'One stop shop'と表現される、一種類の検査でさまざまな情報が得られる検査方法なのです。医療費削減が叫ばれている昨今、CT, MRIをスクリーニングとして第一の検査とし、その結果から本当に必要な検査を精査として行っていくことがこれからの方向と思われます。心臓カテーテル検査をはじめとする従来の検査法はそれぞれの特徴を生かしてこそその威力が発揮できます。CT, MRIも含めて検査の組み立てを考え直す時期がくるでしょう。

当センターでは循環器専用開発された超高速CTが、埼玉県内で唯一稼動しており、すでに臨床に役立っています。MRIについては近年中に新装置が導入されれば、すぐにでも用いていけるようにと準備中です。

21世紀になって時代の動きを感じる昨今ですが、心疾患の画像診断も変化が予感されます。